千五百番歌合

雑之一

同二

太政官文庫
和書門 類
三二三一五 號
函
架
一〇 冊

和書門 類
三二三一五 號
二二七 函
一四 架
一〇 冊

内閣文庫
和書 類
三二三一五 號
一〇 冊
二〇一 函
一〇 架

238

内閣文庫
番號 和 32315
冊數 10 (10)
函號 201 151

共十

閣文38

国立公文書館
National Archives of Japan

千五百番歌合巻第十九　雑一　判者前権僧正

千三百五十一番

左勝　　女房

ゆくすゑも万代かけて住よしの松や種まく行岸の姫松

右　　三宮

久かたの空にしられぬ浪のうへに雲とききしも奥のつりふね

君か代はたくひを見てやたのめし松の千とせのまつ佐

よし〳〵の松ゆゑ左の勝

千三百五十二番

左　　左大臣

みな人の世にふるほとはありそなるなるかひいそきをよひいれぬとも

右勝　　内大臣

てのうちやいはしことはよそきのためしをおもふくそなりけり
世々変のうきにうくしてさへ世にかゝるみちはあれ共ゆふ
為勝
千三百五十三番
左　前権僧正
明石かたあかしの浦のむかしはまてたに夕くれけり跡のしら浪
右勝　忠良卿
さひしさは秋人をこすゑのあさあけにてたちもかれぬとまつの夕風
せめて秋の夕暮鶴のねと春風の人もこすゑは義なくは右
為勝
千三百五十四番
左　公継卿
みさけある人はいかなるむかしゆふ山のさとのうらしほにと
右勝　兼宗卿

住吉の松のこすゑのふる緑つもれるちよをそみてくるる
あすらむは明り山のさとよりを緑の色はするよしの宮
以右勝
千三百五十五番
左　公経卿
吹よ又つましと鶯の我おもひにゆくものの草の色をむつまし
右勝　通光卿
いかにへてしとりまの世のちへてをとひ逢つるあさつゆのうへ
世のちへてとかくよそへはむかし野のあさましき暁の宮
以右為勝
千三百五十六番
左　季能卿
ふるさとの跡をたつねしいかなれはあすは櫻の花をさかしらん
右勝　秋河

秋風にさそひしき峯にまかせくらひ滝の音を待らん
滝の音にかよふ心をさそ又外の名ハ松たつすけの枕なり

千三百五十七番

左　　家隆

いしのかけ日数にけぬるおちこちの空なる秋の雲にかかるあさふく

右勝　　俊成卿女

猶見まる月に清へさそひし奥山の嶺のあらしの留らぬそうら
猶さめまる月そさそひしき雨後あそてあかつきなきの
ねさめ花の宵の紀を惜れ右為勝

千三百五十八番

左勝　　保季

古の神世をしくや春のむ梅の花の香ハ清くみえそ花にみえん

右　　丹後

時しあれハむハ春よりも秋のいろも結ひしもあらぬ秋のいろに
錦とハめつらしからぬむさされハ神世のおなしやそ紀ん
左勝歟

千三百五十九番

左　　小侍従

袖にかく露もまさらぬ曉に中つけるの明そあかき

右勝　　越前

いすゝ川その辰是に神代の風にかゝ浪立て
暁の名のねさしや神代山たひかけそ風のたてやそ以右
為勝

千三百六十番

左勝　　三位中将

ゆめよと称する舟と出あらん月に棹さしてたゆたふらし

右　　　　　　　定家朝臣

大かたの月もつれなき鵲の声にぬるしき友船のそら

なかなかにとまらぬ舟の空よりも月に棹こそさしまさ
るらめ猶右勝へ

千三百六十一番

左持　　　　　有家朝臣

絶されていく世になりぬ秋風やいはせの川のきよら比なかれ

右　　　　　　通具朝臣

嵐乃ねよかの山路の松風は紫なるこその秋とて無也

秋をはいはす河原に吹かきぬ時くゆるを松のもとに

千三百六十二番

左　　　　　　保季朝臣

高入山路のふかくなるまゝに月しもあれて見えわたるかな

右勝　　　　　家隆朝臣

秋風やみもすそ川の岩清水まさるあとやすみけりけん

かけまくもかしこき秋のみやゐをはなにあふけとかいはん
おもふへき

千三百六十三番

左持　　　　　良平

いかなれはおなしそらよりふる雨の春秋のへのいろかはるらん

右　　　　　　雅経

あつまやの木の葉の色のまさるかな羽となる池のあらん

雨をよも猶とさきの池の上乃夕露あさしもあはれ

千三百六十四番

左　　　　　　具親

ちる月をまよふ嵐の中にふけて擣衣しるたへのかく山

右　如寒着得火　寂蓮

岩のうへの風をこのみそを涼の霧にあつそれき

あはれ之は浪の霧にとりうつて衣をたゝん秋の白露

雅定

千三百六十五番

左　顕昭

ゆめとて鴫の羽音にかへるきぬきぬの声をきく夜の

右勝　家長

八重さけいつを八重ひらきとめくみよこもよ秋の万代

かけまけるる鴫の羽音をいそくは八重の衣よき遊さ

まへつくぬれ右為勝

千三百六十六番

左勝　女房

ありそ海のやしほにかよふ浦風に浪もくれぬあきの稲葉

右　内大臣

擣衣やさつき緑の色みえて浦風秋は風ろすゑし

あさ小夜ちるくれぬし風をとかくすゑすゑし

みさるたたむ勝

千三百六十七番

左持　忠良

かの人をあきれ忘れし秋の夜のきぬたの音をきく

右　忠信

山さとのけふのやその風にほのかなる涼を出る月かけ

月かけ夜鹿の雲霧出ぬまに嵐にいはれのなそうか

しらむ

祝歌

千三百六十八番

左　　前権僧正

君か代にあつまのくもとりしもはまにみちぬ我身なからん

右勝　　兼宗卿

風の音にあきやそよきておもほえは夜とそのむしまもの竹

もと柏もとのはいまも猶のこそされにし竹のよと

こそかんれゆ右勝

千三百六十九番

左勝　　公継卿

むかしこの庭の清めに参しきまてあはれたゝいるかなれの

右　　通光卿

萬たそん心紙は志りしころ月の影かのかゝるなるをそらふ

あさかにこの庭の夕の宴をしれそこふよころ月の

千三百七十番

左　　公経卿

山のはにまつ出るやのいるれや影のもなしのいろかね

右勝　　狀阿

そしたるやこ庭の菊の露原をいく末の千代を君にそふらん

君か代のいく末の千世を松の葉に染まかしはおしと

うおりゆ右勝

千三百七十一番

左　　季能卿

深山木の梢にさわくやかけぬらん月にさしひさるむさしのゝ

一乏

右　勝　　　　俊成卿女

あはれなる人をしのぶのねやのうちはけふもあらしの松を
あはれなる雲のけしきの松風にとおもへしのぶらむ

さらひの二首は右為勝

千三百七十二番

左　勝　　　　家隆朝臣

忘らるゝ花の春風なれて秋くるまゝの夕露かなしきを

右　　　　丹後

くもりなき空ならぬよその袖まで月はめでてあはれなるらん
ながめしき秋よりの木の間もよそも月のさそはれぬる

左為勝

千三百七十三番

左　持　　　　顕昭

菊をまた先のたあかく契りさてまつ見る人と今忘れつ

右　　　　越前

擣衣人の非あらひまはす袖の音さへあかし
ながめくにあまたそへてまつ何しゆへおもひしも夜は

かねし両為持

千三百七十四番

左　勝　　　　小侍従

憐みてうき雨の袂の空るれ露これをみる月をすくなからざる

右　　　　定家朝臣

あ川のかの野山の木葉のさらにさらば秋ともしれぬ夕暮の色
ゆくまゝの雨の松はさまともえて野山花まはめぬらく

まぬ左勝歟

三百七十五番

左 持　　隆信朝臣

あきの池はみきはにこほれてんに月をやとしけるかな

右　　通具卿

わかれての世にはまつさかる河竹を君に契れるあとそかしき

此左右は文字あそひて持とすへし詞のことはもつけかくて

三百七十六番

優古今

左 持　　有家朝臣

風ふけはあまのとまやのあまとまくゝをかりまよふ浪の上

右　　家隆朝臣

霧たちて又拾田の神まつるとこそ世はも末なき秋の山雲

此比の風乃作あまたなれくて多さしく文字はいつまても有し

三百七十七番

左 持　　保季朝臣

一もとはふるからまねくまよはせかなしく袖に山おろしふくを

右　　雅経

むしれとや苔のさむしろうちはらひ猿なくへき雲の下風

とおくまて雲の下風山おろし吹みたれぬるつらん

四文持之

三百七十八番

左　　良平

嵐はらふ此葉まてとく春の法のさえをあさらすくらん

右 勝 如禄者得衣　　寂蓮

今そ思ふさと山の猿人もありなくしける業のうて

みまいこれとあらはれなりける衣のかさねくはなくて

あきらくれぬるものゆへ猶勝人

千三百七十九番

左　　具親

それとなき世ハ春と思ひし（月イ）なかし夏のおもひつゝ秋のそら（ゝも）

右勝　　家長

はひ比ハ和哥のうら浪たちそひて見をやまつまつ鴻ひめ（こもりイ）

せきのいつるとちかへる和哥のうらに見てまつらん哉

つゝしひめ離れ左の勝

千三百八十番

左　　顕昭

山ゝの田のみなせ川に年経へて浪やかはらん鶴乃毛衣

右勝　　三宮

者の羽をかへすのひとこゝをかけ出てある浪をまちぬるのまゝ（かし）

慈円とらきくあらの北山に哀するまへるの判　以右勝

千三百八十一番

左勝　　女房

すまのうらに結ひかけし月影に浪のあはれに濡れむらん

右　　左右心

続古今

うらさてみつらあかくさん山のちりかはすゝかけれは

あらしき浪のおとさの月影にみれはくもり濱なる

山のこゝみ左の勝

千三百八十二番

左勝　　忠良

新古今

舟のうら浪乃下まて花にくもあさましき海なのせや

右　　　　兼宗卿

春の日の恵にてらし久方の雲井にしらるゝ川のわたりかね
浪のたつさあさしのたまさかにふれはそのしくるなみ
川のしるへかなむ　左勝

千三百八十三番

左　　　　有家朝臣

やりよけりかゝる代橋へ渡し我か君の末はかきられぬかな

右勝　　　通光卿

かすかやまむかしの跡のたえすしてひさしかるらん宮代雲風
松風に昔のしらへひかせてもひさしかるらん　あそこなるけ比　なむ左勝

千三百八十四番

左　　　　公経卿

秋しもあられとかふりそひくらん雪かりうしのなせにそふる

右勝　　　牧河

冬くぬみ北のしら乃呉竹を君か代まてそ千世へしけらん
君か代に千世むけるへふしれ竹の千世ある北まよふかな　ぬ

千三百八十五番

左持　　　公経卿

きゝへとふし見そ秋のさつきとて軒はの風に萩も鳴也

右　　　　俊成卿女

渕しぬひくのたのやよ月をみて風こそ秋の音にきこゆれ
いつくそとうつゝの萩を風の音もいさとそひふかそまれ　ぬ

千三百八十六番

左持　　　季能卿

くれはのあはひのはしとさえて見てと熱かへつとたへぬ藤かね

右　丹後

あはれなるすみかの山かけ小池とともにむへなく雨とやいはん

すへてくそそらとりいそそあめ下しあはれの松をすのへし

のやを以持之

千三百八十七番

左　家隆

よこのいろいく世の沼とへ臥てくるとぬとこおしかしかへしも

右　越前

ふる世のあきやかに秋中の月の銭とまへ民志う君へとも

思ひやるあやしのこそに雨よみ短月の志う人にすへし演行る

らん右勝之

千三百八十八番

左　讃岐

心あらは見てみるへしなかるれはおもはこそなけきそかけし湯

右　定家朝臣

本様
いく世へぬるかたしおほろかんいはへ千二勝のひかりのおかのかひら

れむあまのいかあるへくはつかの御と一守のひかりにみたてるさなん

以右為勝

千三百八十九番

左　小侍従

うたあはせのこころを何の事のあはれてあまあはせるかきをは

右　通具卿

右勝

見るやとゝめしかえて八雅波ゝ入江のかりのとかあらはれまん

うきふしは有とこそきけかくしてや入江のさゝのなにゝなるらん

以左為勝

千三百九十番

左　　　　隆信朝臣

鶴ぞてんかはりて月を世のうつれりとおもひいりなむ

右勝　　　家隆朝臣

住の江の月に千代のしらべへは松の梢に秋ぞ聞ゆる

かくれぬの底にすみしく住の江にみるとあかん松の秋風

以右為勝

千三百九十一番

左勝　　　有家朝臣

山のはの雲に紛るゝけしきまでさも明らかに影まてられ

右　　　　雅経

雲まよふ嵐にやどる足引の山のつきの夕されのそら

山のはのあかし霧まよふあはつしくとみむろの花かな

以左勝之

千三百九十二番

左　　　　保季朝臣

ちりかへてうつりしかげし菊の庵もすみなれにしより秋ぞへにける

右勝　如高人得之　　寂蓮

里とほき谷の庵のしばひさしいかに眠りのみかけて

柴の庵ありとて庵ひさし所てもいとふへきかな

以右為勝

千三百九十三番

左勝　　　良平

夕暮は山の端いづる月をまちてくさとやもねる空のとりしも

右　　　　家長

名にしおふ万の葉まで秋のこの色にかはりしめぐり
万の木草もみなはてゝも見るぬ此ほとしらけれくもなき此花
右勝

千三百九十四番

左勝　具親

あらくへをとけかい二橋の山松はかはらぬ色もかはりそ

右　定家

浪の音を風のひゞきに通しかすかにて世にめぐみ松まもし濡
夢のぬまでゝ松はしるしをしるめ千し浪のよせ来る此松かな
ちとせ能ふに左勝之

千三百九十五番

左　顕昭

きみが代のあらハれてよしはかりのつきく影のまけりけり

右勝　因信

うきのよとさとゝみへのあそこや八重の志るしをかひ三くれ
松風ハ千世の色にかはらぬ八重の志るしを植けるらし
越え太る勝

千三百九十六番

左勝　女房

都人をりて月ハ松の庵の初よあけられする影のまけりけせ

右　兼宗

ゆりよくる幾の思尾よき年ハいく年浪をこゝろにこめかへん
松の庵の初よあれていとしく安かあるれ松のかけ
なた勝

千三百九十七番

左勝　忠良

君が代のこりさく影をかしこみし新こゝろもいつくらさした

右　道光

年毎にあひみる竹の世々をへて久しかれとも君わる御代かな

としことに生そふ竹のよゝをへてかはらぬ色を誰やみるらん

以左為勝

三百九十八番

左　前権僧正

たのみこし人をまちける庭の松の下葉おいてしとぬるとそ

右勝　秋阿

秋の夜の風にうつろふ露の玉[illegible]とせすなかきそめし

とこそしるへにはなとこそまちしかいつとたのみはかれし

以右為勝

三百九十九番

左勝　為継卿

旅人のけふ嵐吹らし山川をふくらみなる雨はれぬる也

新古今

かくして色をいつくの秋も見なん山路の苔乃露のさひしさ

右　後鳥羽院女

あきし河あかぬ色くに雪の花の[illegible]さとのさ遊

四百番

左勝　為経卿

あつさ山あらし昔乃面かけいさよひの里の有明の月

右　丹後

しらつゆにそむるかみのしたもしきの戸に[illegible]

ちかくとさへもとむらいうき山里にも[illegible]

左勝之

四百一番

左持　　　季経

まくら浦こそ雲をもてすゝけの風にさそはれて鵜のきん

越前

高砂の雲路もとはるれどもあはれそるるといつつまして

とまらくにいひあはせてやみゆらん雪のしらねを

高砂の松持歟

千四百二十二番

左持　　　家隆

中くもりあかきのねまちのつきけるたぬの鴫乃声ゆふされ

右　　　定家朝臣

秋とてもひのくま川の水清く影とゝまる月のかげのみぞとまる

かげよりもまさる月とゝまりけるあか月の叢のかしま也

ひのくま川を為勝也

千四百二十三番

左勝　　　摂政

新古今
男のうきよ月やおもひなしのまゝの昔おもふなかも我身ひとつにしるる

右　　　通光卿

暁はひとり寝ざめのよはまさり(?)あはれ物思ふ鴫のなくらん

男のうきよ秋は縁はけふぞ哀なる月やあはれの春の暁の

は左為勝

千四百二十四番

左　　　小侍従

吉羽河たえずも宇治つゝやうらみてて年比おしみの宵

右勝　　　家隆卿

いく代とも志らぬ遠袖ハ志ら雲の上よりかゝる布引の滝

いちしるく高波へ長く雪の音之雲よりさかる布引の滝

以右為勝

千四百五番

左 持 隆信朝臣

古ゑハいくへの雲に住となりてうきたる山のみねの月かけ

右 雅経

住と出てしとまりつくしみ絶ぬねまきこそそら住する涙ちるらんせ

とにかくに山鏡涙ちりハおもれせんにおもし勝のまるなり

千四百六番

左 持 有家朝臣

花ゆゑに越へ人の上のひとしれぬもとの山のみねのしら雲

右 如子得勝 寂蓮

かゝる流清の花そ賞よ猶をおしとるまま地をひかるらん

おなしくも如子得勝のなかれをとらむ君てやひとつらん

継左勝之

千四百七番

左 勝 保季朝臣

[玉葉]

山ふかくを徳ハ友まとひふたつをまつとにあつくなからなやちん

右 家長

これまてを色うしと北御代まかりつねハいかしく今の花をこそよく

うむく君雨ともなれハと現ねとおひきるこそけなき

加信由れ左勝之

千四百八番

左 持 良平

やまのいろありのまそてハひとりまそて村もとまるみやこし流

右　　　　三宮

あかし昔の人はなくなそ歌中のきみはかくもとまん

ましの原村をまる酒ま文歌中の文をあさらぬは心持歌

千四百九番

左勝　　　　具親

まそのゝろく秋の月をみるかすて秋の山をも酒よまつらん

右　　　　内大臣

昨うしは都やはるくまぬあらんかけるの露わきこゆる

山のも残酒のうへまた待をもし月のみるめやうけうあらん

千四百十番

左　　　　顕昭

我衣とへめみつらん紫のあの露をしう紀まうつは持くむ所

右勝　　　　忠良卿

あかつきやまちのありつる酒るて思の本る子無れつりを

書にみるいは持かいはくもろへきかしそ見んくは如める

めれたの勝

千四百十一番

左勝　　　　女房

これやさは都まてみし竹の中さそれとなくさしく影の縁かし

右　　　　通光卿

吉遠あ残りうかへるはしてうちくやのときあ如くの

さらぬくも影のまこそうひあかされとれもちうしく

ふうさそたむ二首也

千四百十二番

左　　　　　　　　　左大臣

春の田をかへしつくる民をみるたひにうれしくそ思ふ世をこそは思へ

右　　　　　　　　　秋河

世の海おさまれる世は春ふかき亀の尾山をなかそこのこえん

たのしさていとなむ民をおもふあまをまもらせなし

亀の尾山ハ右の勝

千五百十二番

左　　　　　　　　　前権僧正

慈まさる難波のうらにやく塩のあつまれて煙たなひくなり

右勝　　　　　　　　俊成卿女

もろこしにあふみの名をあしと思ひしよりいろふかくの春の色

御代のすゑまてかきしるしまもりやよしのの山おく

の松風は右の勝

千五百十三番

左勝　　　　　　　　公継卿

すきぬめる山のあなたの野分にも秋のこゑそくるしく

右　　　　　　　　　丹後

松風の村にたつる声絶えて宿くつる風をまちひとるなき

ちりもしまさぬまつ気あるしもとのまくしく神やそめ海はなるらん

は左勝

千五百十四番

左勝　　　　　　　　公経卿

月残る神より秋の声すへてたえぬるのまのまその夕暮

右　　　　　　　　　越前

里とほき北山にかへるまなれ暮しゆふかたとおもふ山やまとかる

くれとてもそのまゝ来ぬをまちてまつ袖に月のやどれる
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　哉
然とも左一勝之

千四百十六番

左　　　　　　　　季能卿

あまの原雲のかよひぢ晴て月かげきよくわたる鴻（かり）の声

右勝　　　　　　　定家朝臣

雲に吹あらしの風ぞきゝなれし岩の松のおと
まつ蜘蛛のおもき露に吹松風のおもひさだめしきゝをおさめ
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　そよ

右こ勝之

千四百十七番

左　　　　　　　　家隆朝臣

晴ぬるやさらぬくもゐのまさる里みえそむる村雨のそら

新古今
右　　　　　　　　通具朝臣

一すぢにあれなんさても松の戸にかくかゝる風の音ぞかなしき
くれとてもあやなくうたゝひと夜のなかるゝねにもまとひぬ

千四百十八番

左勝　　　　　　　讃岐

いかばかりなる秋の花あきかれはぬるにしもそめむしの蓮葉

右　　　　　　　　家隆朝臣

しら露のうつろふ色をかさねてもなにしをきらむ露のまをかこつ
つみにかれしをのをみれはひとゝせを待むとそ讃岐ハ
もしてこそよかるしゆかしと左勝

千四百十九番

左　　　　　　　　小侍従

なかしおつる鵜もゆくらんらぬくのあかつき川の瀬とよくとも

右勝　雅経

風よする雲の下ねのさ秋まくら夢路とこゆるあまの檐そ

檐こそや夢路こえゆくさ秋まくら吹まよふらし

雲の下風ゆ右勝

千四百廿番

左　隆信朝臣

むそ世のあくるさえの秋の空に井のうへにかくつる月かな

右　女房浮船　寂蓮

あまのとのあるまつけてもしほとりあまれ今とは浪の川をさ

やくもの川舟漕ぎてもひろちらのけふ勢あるきかり

ろくんれ右の勝

千四百廿一番

左　有家朝臣

山田もる志川の庵のひさかたまうらあけ夢もあらで稲つかね

右　家長

薬つみの昔の跡はたえてかすみのうへに須の寄人

ますつみの昔此跡こそみえてもとのさはりめや　の右勝

千四百廿二番

左　保季朝臣

さくあさのへのふすまてはひて雁をいとふもあはれ山里

右勝　三宮

やうまけるう三輪のひつじもゆんいで世の人のかさしおもへん

あさけある三輪のひつじのかはしとはゆしてひそ

山の里人 九百六也

千四百廿三番

左　　　　宮守

いそこし鈴の音よあくられてしほさあふ草まくらかな

右勝　　　　内大臣

絶の河の春風よふかうとも浪の音とけて来るやうらん
浪の音やうすまはりらんあくられてたかふ音は春白なれは

以左為勝

千四百廿四番

左　　　　具親

草の庵は霧しほふりきそ嵐そさしむらお坂の世紀

右　　　　忠良

月よみつ湖の浪と捕まてこやうの葉は風まれ笑くなり
葉は春浦と月をみる浪をいさめすよ詠めりしてん
嫌なきにあらねと左勝へし

千四百廿五番

左　　　　雅経

草のけはさかり風さもし勝人の宿ららの雨やいかにしるらん

右勝　　　　兼宗

勝ましてききけしむつまし鈴鹿の音もおもひやあらしあきとは
鈴虫おかし勝手とみえきまこともおもかけ風はあふらし
まのあく鈴のれた右の勝

千五百番歌合巻第二十　雑二　判者　前権僧正

千四百廿六番

左勝　女房

猿〇する秋の夜の風に驚えて打するらむ山はありあけの月

右　釈阿

昔きく鹿への思ひをわすれなる嵐のうちを驚かすらん

ことさらにめでたくきこえはべるを猶この歌やの驚は見る（まさる）

右勝人

千四百廿七番

左　左大臣

我ふるの父としいかなる〇とも花や紅葉をながめきつる

右勝　俊成卿女

しらなみをいとゞすゞしく川音の袖のまくらにかゝるなみかな
花やさそひ袖ぬらすとも山の葉にかゝる袖はくひ
左勝
千四百廿八番
左　　　　　有家朝臣
ちよ代のつきぬみちをの友とあふむものつゝひにあるしとそへと
右　　　　　丹後
我とさそ草葉の枕にむしとひつる露にやとる月の影かな
月とくもに草の袂にやとりぬる袖の露やいかならん
右勝
千四百廿九番
左勝　　　　公経卿
あはれにもとすまるれよるの山里は雲の嵐にまさるあらしかな
右　　　　　越前
うきねするまくら世の夢はかくさめてうかきてかよふころの秋
松風ともふきまかせ月夢のさめかゝかゝ秋いつとて
左勝
千四百卅番
左　　　　　公経卿
冬の夜のなかきもしらぬ枕にあまりてこほれたる霜の下草
右　　　　　定家朝臣
ねくらにの人のむしともしらて露のむすひしゝ花すゝきをかりそめに
冬こゆるはしるもの花の末をみむかしもやらん
左一勝
千四百卅一番
左勝　　　　季経卿
新古今
ふたつのみえのよりくる浪にさそひてよるひさけさる浦の松風

左　　通光朝臣

ともしともあまなほかきの戸の嵐よそろくゆふくれのこゑ
弥さひしくあひさけさる軒風や檜松の戸に吹まよふらん

千四百卅二番

左勝　　家隆

あつめしをいく世すみなれ奥山の月に結ひてある山人

右　　家隆朝臣

古へはあれめし人を末の松まつらん袖に涙やこほる革
赤の雲やまよひ出くともみんゆる更かさなる山人

左勝

千四百卅三番

左勝　　讃岐

後の世は猶しる人の心よりおのつからまつ末のなかれをそしるへき

右　　雅経

玉鷹しき袖しく礒の松かねのあはれなる所を出し涙
花あくて実あはとみんゆるとのへ続吹かへすなりそ礒の雲色

以左為勝

千四百卅四番

左　　小侍従

春日野のかすみしく雪の山にひかれとも見ゆなる花の雲

右勝　　寂蓮
如病得醫

あはれなる風の通路見えはや花の峯をいそくまし
春雲にあひてうくらや恋しからん道を消しその雨の跡は

右勝人

千四百卅五番

左　　澄行朝臣

猿の声かなしかりけん萩原や常盤の秋風ふくよりかりしとも

右勝　家長

むかしこそ思ひかね山のへやまかぜのもとまでゆきをまちて
まちけぬべし人の心にかりがねありん声へそよそひとひとつ

左負

千四百廿六番

左勝　有家朝臣

新古今
春の夜のあさねぐれ流代と夜のむかし書かれぬ草葉にする

右　定家

まくらのいやへの志からとよこ世八重まつる夢の覚つゝ涙
春の夜のふかきあひまうく草なるれはある花波はさはし
さるへしとて以左為勝

千四百廿七番

左　保季朝臣

秋かぜのふかきこの風を身にしみて月にむかひふるさとの山のこと

右勝　内臣

いまの後月にすみなんみよし野の山をこえて入山の端にかゝる月
よしのゝ山を出る月影ば河の山本の流らなんは

左為勝

千四百廿八番

左　良平

あつまよりまつて秋すまの実を北吹こゑ夢の覚つゝかなしき

右　忠良卿

もろこしの小島の浦の月影ににかゝるの涙をうけかな
あはれまた波ならぬの涙に文字ありひねる夢の塩風

以為持

千四百廿九番

左　　　　貞親

高砂やこだかく舟をふらしまて風やすけるる浦のうへかな

右勝　　　兼宗朝臣

待ちうる船のへさきゆるきのいそく浦ちといそてちりぬらん

風やまくこだかく舟やいかやんいそく浦ちよらるんかな

以左為勝

千四百四十番

右　　　能船

とわたるゝ心浦をきいはみちくるとさの夕浪の晴ゆくこのそら

右勝　　　通光卿

遠さしは遊もかすらぬ山路ふ志のあとこしる影の志らせ

影の峯にかゝりひまうけを　て山あかそうしき

左依の夕浪や以左負

千四百四十一番

左勝　　　女房

よゐのまよくかな深山の秋かの秋いかなる夜の月をみるとも

右　　　後成卿女

秋志らぬ代をかくる峯の風の音にかゝりねの夢ぞ残や八十路

さきくさけかゝりねの夢かさへなるよの月ハ忘れし

以左為勝

千四百四十二番

左勝　　　左大臣

月日のこなたわかすて鳴音を年しる人もかなし忘れ

右　　　丹後

ちらとけてまとろうさにそてなほそとい鵜の夢また深め

ちとりてまとろむ夢の床かりそまたなし

ちくさのうちに花に花の勝

千四百四十三番

左　　　　　　　　　前権僧正

きみか代にあふくまかはのたえせぬは百年のちも

右勝　　　　　越前

みの中に此身をそへて世中のつらさをうしと思ふ身に

みのうきにこの身のうさはあはれなるあはれさそわれ

おもふへきことはりなくはさらに右の勝

千四百四十四番

左　　　　　　　公経卿

ますらおかいさなとりつゝ秋風に身をしめつゝゝん

右　　　　　　　良経卿

うちはれ雲たちかへりのこるかたにしほのゝみなと

うちはれ松のあとのはるもいさなふ風もたえたえや

おもふへしの右の持

千四百四十五番

左持　　　　　　公経卿

ますらをかいひのかはなみあさひにほふらしかつらき

新続古

こまつ原まつの嶺の波枕さそはゆめさますの松風

なかしらの嶺なれ嶺の雲風とふいはねの松のゝ

千四百四十六番

左持　　　　　　季経卿

むらさめのしのはきたちさかへしきやかたのよのゝ世の

右　　　　　　　　　　家隆卿

ゆふこそ涙にうけしからまてやしく秋に袖はぬれしかな

かち枕やよしく露よるつる程ありて霎し夢とや見ん

以右為勝之

千五百四十七番

左勝　　　　　　　　　宮内卿

きのふ見しはやのゝ川の雲もとのとまり世ましは法の縁を

右　　　　　　　　　　雅経

しらぬ人の末をもかれにそて嘗ふるてんまし法のくれ

武蔵のゝ霞もこゝろにみえしかはしまかくの縁なし

仍以左為勝

千五百四十八番

左持　　　　　　　　　讃岐

行末をおもふ人わかれの田でましてはなひくてなくていつか見しを

右　如暗得灯　　　　　寂蓮

ゆきかへる光をまちてあつめてもなかくしらぬ法のともし火

ちるらむし法の灯をと消ぬくいひくてさても流に

以持之

千五百四十九番

左　　　　　　　　　　小侍従

くもりなきそのくもとるけむ人はこゝろにすむかとそとめん

右勝　　　　　　　　　家長

かきくらす蓮葉をのみ法の海の岸をはなれてすゝむの人

くもりなきよにそのくもまちをみえはあまりのこる人

以右為勝

千四百五十番

左　　　　通具卿

秋くれと深山の里の夜の風はきくもきゝぬとさそひしかね

右勝　　　三宮

かりそめと思ひし袖の露けさもくれぬる秋のなこりなりけん

月まつとやとまちわひしも松風ぬれぬやいつくまちかねぬる

勝也

千四百五十一番

左　　　　有家朝臣

人ねしてあるなる月すてゝ秋の月をもとうちかへるらくれつゝ

右勝　　　内大臣

判詞

やまとなる川神のちりひをまたとゝめし二世の佛のめくみならまし

うれしさもいはぬ人にて月のるまゝ神をも佛とたのむそふかき

以左為勝

千四百五十二番

左　　　　保季朝臣

袖ぬらすこととなる身のひとつなる秋の月風をぬれあり

右　　　　家隆朝臣

月影を待ちもあかしてあるとき入る山のはの

みねの松月にかゝれる山のまの秋の夜風吹まさるらし

左勝

千四百五十三番

左持　　　忠良

秋くれは小萩の下にしかなくそ山月を送りてすむ事こそあらん

右　　　　兼宗

秋の夜は月のまどに山里さそひしあかのみのそら

なか中をまてしまりある親も忘れぬ我道のあ月をみる夏月之　ゆみ朽

千句百五十四番

左　　　具親

月いくへ我をさそひや波まくら旅寝の夢をちらしもののし波

右勝　　　通光卿

秋の夜ハ風さむしう枕はてゝも明る月をみられたし

孫枕かくてみ逢いてしく月は明るやすき枕ならん　ゆれたれ勝

千句百五十五番

左　　　能船

すゝ虫の紙ゆる音すや枕して鳴んすむ野の上野にきこえ立也

右勝　　　釈阿

うけて世ハいと人をすまん春日山にかとていくくの雨さるへき

昔ならぬ木のくものる音山をならひてゆるす　字

むかし自也

千句百五十六番

右勝　　　慶

月残る草庵のさとの夜明に昔にかへる身はいさり火

左　　　丹後

人ゆく江の宿の苔の下にも宿れ月の影は流し々の

若みしかとまる月にあかりてけきやうなるあ

まのいさり火のへたる勝

千句百五十七番

右勝　　　たたし

きょう千枕をとふらぬもまたれいふかうて世をやゑまし

続拾遺
右　　　　　　　　　　　　越前
しらてやぬ我身を海のうつせ貝むなしき世とはいふものから
あはれかはこひねかひて世るれはみえてくらへつる貝哉　能と持之

千四百五十八番

左　　　　　　　　　　　　前権僧正
あかれ雲難波のあしのうらつたひそのゝ鶴の霜のうへかな

右勝　　　　　　　　　　　定家朝臣
年ふれは霜夜のやとにちかく鶴とかつまて浦のまそたちなれん
めつらしくのむ霜よの鶴のなくやたつの浦に鳴なるらん
以右為勝

千四百五十九番

左持　　　　　　　　　　　公経
つらゝゐるのきはしたゝるあしたのこほれとみえし世ハ

右　　　　　　　　　　　　通具朝臣
ちりしくるぬあられとれしつゝ幾秋の霜の暁のうら
又つらゝるの橋の上をわたるとこそしらへ暁乃空　能こ一の持歟

千四百六十番

左勝　　　　　　　　　　　公経
かへしてはなほさむし泉河あさちふく秋のあつまの雲

右　　　　　　　　　　　　家隆朝臣
我庵は嵐の松にしくるらんそれともしらぬ深山木のかけ
嵐の松又深山木のたえふるまゝあやすれハ暁の雲　左勝之

千四百六十一番

左　　　　　　　　　　　　季能

丸き身のちらしのうらに詠られてこゝろくるしみ男とも見ゆや

右勝　雅経

春の夜ふけにわかれつる袖枕夜やいしとも妹秋りの白妙

指きのきうと此方ハ左りしとくしと此方の袖まくらん　以右為勝

千四百六十二番

左持　家隆

ゆく行ハ猶よりて浪路もなし山のはつくまもなくかくれん

右　女房大将實　兼董

まひとのんなりハなよひそて左つまさこえこなれしかくし紛ん

まひとのこれしきゆへをくもり世中の紀ち方代眼まもとしそ

以持之

千四百六十三番

勅撰　左　讃岐

秋ふけて何しろ人ぞ秋の月山路ちらくとすゝやしぬらん

右勝　家長

君か代にそのめくみは袖にぬれたる山ととゝのゆきの一しか

君か世にそのめくみハもと見まさるれはと一しかと男ふそしもハ　左ニ勝へき

千四百六十四番

左　小侍従

こゝやましらくみらしのせこしうを見まゝり世ん人のくや

右勝　定家

真つきを流れうらき吹くまのかりをやしぬ夕々みかりわれ

みまよひかはりてみらしの秀まりを流れく浦子風まさる　以右為勝

千四百六十五番

左　　　治部卿
秋霧に猶へおもひたえぬをとし見むなとなかむる山もり
右勝　　内下
佐山の紅葉ちりてのこれるもみぢを道に秋ましひめる
昔のこんひやうの木のかれにたる道そけに茂るむた
勝
千四百六十六番
左　　　季家卿
月の頃しかもくまれいはまにもみち入ともゆつしとう思
右　　　有家卿
秋の夜の秋の月は花より雲に思ひ月にかくれなき
述懐のころくのみそいはてしてそ定むへくもれは
持之
千四百六十七番

左　　　保季卿
明ぬまも涙へゆかさき清見かた宮城いはるの名のみてそ思ふ
右勝　　兼宗卿
後拾遺
佐山寺中しくの秋すさん影まてこよりとのこする
佐山のへそあかれする秋あかれまはあとおもふ家へ
勝
千四百六十八番
左勝　　良平
春の日のめくみ給まつよのゆるき敷のめなの花のまそよ
右　　　通光卿
かくしつつ世のあまるなれぬさん年の花よ初秋しるて
あかとあくさころへ松よかるしめ花の末なき秋あなれ
とうかた　左一勝

千四百六十九番

左　具親

世の中はさてもやすると心みにありし昔のあきのゆふくれ

右　釈阿

萬世の浪にこゝろもしきなみのあきのみなくさし[illegible]

吉野川おとしぬなかれのかはさへいくとせへてもきみか代

すくれは右為勝

千四百七十番

左　顕昭

ふる里の友といつくのむかしをかたりしちよのひのいかならまし

右勝　俊成卿女

清見かたうきねの浪にやとる秋は月もなみまにたつるかな

ときはなる清見か月のあきまつりやまよりいでゝひのいかなる

以右為勝

千四百七十一番

左持　女房

あれはてゝよそにあきまつる宿の雲風にひとつすみところあきらけき月

右　越前

こゝろもなきみやはくるしくよにあられすてゝあかりぬる

後京極

あきらけの月はくものうへにあかりぬるかな

捨られぬうき雲をおもへ

千四百七十二番

左持　定家

すみわつらふ世はさてもあるをとこたへてこうへにぬる

右　定家卿下

よろしはあらし我とせめきゝんなつくへてこそうつゝにあひぬ
うつゝにあひて見しことのかなしきをんゆめならぬゆく き
哥しかるらん ゆめおもへ

千四百七十三番

左 前権僧正

露のうら葉の松風身にしみてさしひつきと世の別れ哉

右 通光卿

あまりうら三千ハ霜の秋かけて松まつ身あさましの霜
あまりに三十の霜の松まつあられ秋のうつろあらず
ゆち勝

千四百七十四番

左 公継卿

嶺とめてしこゝまや声しるしかりん身もまくもの花の香のした

右勝 家隆卿

むかしたに昔おもひしのかけのむかしの江をしをしのふ
ちらはるかの橋の江をされハ昔のむかしさそれにけるむかし勝

千四百七十五番

左 公経卿

あかし世の月を恨さま袖ぬれて袖つかしあはむかしあけのせと

右勝 雅経

花への雲山のしつくとあなまてかしとつせし紀勝ころもうか
袖ひて袖かしあら世とその色をねれまたろさひ衣 右勝次

千四百七十六番

左持 季能卿

んやるたこそたなくなの波されむなれにもかしおもへ

右　[illegible]　　寂蓮

難波津よそのゝ袖へかへりてはかくあまもなほおもひけむ
しらやるともさだめそこはかくあまをはかせん　以勝之

千四百七十七番

左持　　[illegible]

昔かくこそさへぎる霜とみえしかなしき世はかはりゆく山川の水

右　　家長

としかさぬるきさらぎ春は過ぬれどむかしまことゆくすゑの流
さかくよりひかりしてとみえぬ京の春をしる浪の山岸の末　以為持

千四百七十八番

左持　　讃岐

あかくなしくれゆく代をおもふのまつとせしまに年をつもらむ

右　　[illegible]

よそせめて身のかはりにあらはせし袖も涙の露のぬれ
猶もおもはひはこれくよあはれにぬるゝ百夜の袖　以為持

千四百七十九番

左勝　　小侍従

みをさとる外はまくらん霜をくやまふかうしあはつきの夜

右　　具親

世をとひと海人のかゝる山里にみすまてうちゆかまし
みちゆくのかりやとりかん君にくふよりこのつきの夜たれ　勝之

千四百八十番

左　　[illegible]

浦ちかきのいそのさかひまさにたつの雲と夕ちるこのしほ

右勝　　　　　丹後

世中をそむきてもなを椎柴やさらし色ぬへきわか袂かな

なみたなくいひくらしつる椎柴やうすゝみの涙そおほ

まさるらんよりて右の勝

千四百八十一番

左持　　　　　有家朝臣

続古今
うちなかめ程へつゝまちてもわかし残夢の夢の枕かへて

右　　　　　慈円

怪へきへなれはおほくすら荒へ世をそむけるつ

とふくさひろうこそあはれなるあはれとも有なく

為持

千四百八十二番

左持　　　　　保季朝臣

山ふかくすむ人のとはゝめ月まつけてハ嵐もかな

右　　　　　通光卿

誰もなく花のうけとらむさゝらきて霜をゆるる庭の白らし

とひよれは都といひて忍ふむつらき山下に庭の

うけちをゆ持ん

千四百八十三番

左勝　　　　　良平

まれにきてをしむまれて年やへん春暮くまた北山門のみち

右　　　　　雅経

続古今
あら磯の波のかれいつまれをのかれぬ袖ハあさつしく涙

ひとつ思ふある春暮くれの山おくハ黒つるこまもなき

されとし猶こいれ左の勝

千四百八十四番

左　　　　　　具親

きりきりすいかりと夢のさひ枕夜ころこそあかぬ秋のこゝろね

右勝　　　　　俊成卿女

かりそめの旅ねの床もかれはてゝ露のおきふしなれそなきらむ

猶もみる夢ちもまくらの露のなれはしくれしものをけさ

猶又左勝

千四百八十五番

左持　　　　　家隆

袖ぬらし床の下葉もあさ風旅衣あらそひかねつ秋のよは

右　　　　　　丹後

山のはにいさよふ月の影さえてふけゆく身にそなかめわひぬれ

さらぬたにふるさと人のとひくれぬ月とゝもにもしはしなかめよ

千四百八十六番

左勝　　　　　女房

後鳥羽院

鵜舟さすあかつきくらき浅瀬行てゝを涙とともにすむ宇治川の月

右　　　　　　宮内卿

あれはてゝふるひとのきまゝつゝ霞みて身にしみてもるゝあとたえふけ

にふくる袖も及はぬひとむかしこの宇治川の月

判左右右負也

千四百八十七番

左勝　　　　　家長

まもるあひぬる身にこそしられけれなにやはらかん代々の末まて

右　　　　　　通具卿

此御代にあふそらわきせきの風やまの浦浪のあきのしら波

代々とつもれしとやのもそれなる杉ものかなこそいとはる　季経

左勝

千四百八十八番

左　　　　前権僧正

朝の女みてをちつさ玉のをのくをそはれ人はうるか

右勝　　　家隆朝臣

うちあけあまとりてあつまの世にむかひくもいそといかにし

山あよりのそこよりしてしはかはされなもいつく忍ふのはな

仍左負之　　秋のあはれまて

千四百八十九番

左　　　　　　右経

うらしくまをへ秋にあはれさて江をとまりわり川の水

左勝　　　　　　雅経

玉葉
あはれとてたもぬ山路はとらつきゝとふつけし有明の月

いつらいのへの恋にすゝきゆきんこれは江あるわり川の水

はれ左の勝

千四百九十番

左持　　　　　右経

ふるさんへ中く後ぬ千浦のさきすやに世をつりしてと

左　如貫客将海　　　寂蓮

見しれあてぬとろつしぬの月あきて世をつりたにはふの浪のゝ

あはれさ代るありあくもとへんと宿のふるさしぬの江の

左らかゝ能二の持ん

千四百九十一番

左　　　　　　季経

あきらかに月の夜なくあやなきに年ふる身こそあきらけれ　なし

右勝　　　　家長

ちよ代に山さとまさに山藤のところにあひもん春のいろへ
一はらかぞひなれこそあはれ遠き千代の春の
うしろのくれ右為勝

千四百九十二番

左　　　　　家隆

まつのかぜそでやつまにもふけゆけばかくへきまの月

右　　　　　三宮

ゆきつもる葉をいかりそめ涙まちかれなる春のなごりへ
かくまでの月はあはれとおもはぬものかは

為持

千四百九十三番

左　　　　　讃岐

むかしにもなき春あはれしれけよ行のしの夢

右　　　　　内大臣

年くれてうしろ春のもろともに春のみかん見る
うつつ春のひとつの春の波にあはれすきすくるしの夢

為右勝く

千四百九十四番

左持　　　　小侍従

あかこそうれしわかれ春あはれの文人へまちにさまよしつとめる

右　　　　　忠良

いまさらしともあはれ涙さまよしつきさへあはれのまよしかなしさ

さゝくまにさけく御ぬかのこ原の年をれぬ世のめくみかな　きさいの宮

千四百九十五番

左勝　隆信朝臣

位山のほりさかゆく椎柴の道にまよひて花にくらすな

右　兼宗卿

いそきたつみなとをさし浦しらぬあまの流代にあはむ君とそおもひ

あはれなるかなさくの世のみちあるかさなりぬるへきにしれつゝ

ことわり也

千四百九十六番

左持　有家朝臣

ありかよふきみしあまくさ代に雨千歳にこそかすへ和かなかくさよ

右　通光卿

ここれなく恵みのさゝ川のつゆもやかてよろつよの和か代

たえましかるあしへのつるをかすてへあまりたちゐるよろつよの

うきみのうちにありと　こたへの御詞と

千四百九十七番

左　保季朝臣

ねかはぬ神とよろつよまての代にあふきみそかつらて

右勝　秋阿

いのりてしこゝろかなれよまつ代のよの世のきみしめ時かそにあかん

まつ代の世のちしめもあつされけにねかはぬ神とこそ

これはたゝの負

千四百九十八番

左　良平

人かたよりおかしつもあやかよてこれに体もなくつゆのしらそ

とよ

左勝　　　　　　　　　俊成卿女

こころしてたれか月影をあはれなるらし あけの松の風のおとに

月まて更けし あけのまつの風の音やつもるらん

吹まよふらんは右為勝

千四百九十九番

左　　　　　　　　　具親

続古今

いそのかみふるの中道たえはてし よそよそにのみ大和しき氏家

右勝　　　　　　　　　丹後

ちよ代をと祈らん君こそうれしけれ久かたの月の影ところとも

後のよを祈しよ祈りて見ゆるかこそ君る祈る祈る

以右為勝

千五百番

左持　　　　　　　　　顕昭

あるしこそきみかれ花の色にうつむしもつゆ花さかりの

右　　　　　　　　　越前

年をつぬるの月よしをあかんにし人のやとにうつろふへき

ちよ代のひかり花あくみよあひぬまは見ひるおもしや

ともよれなん以持

勅なれはなほふるのしらぬもいるひねと

よしあしふこそ成さしらひぬま

千五百番歌合巻第二十終

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan